実習レポートを書く際の注意点[a]

山口大学　大学院医学系研究科　有賀隆行[b]

すべての実習レポートには**【目的】【方法】【結果】【考察】**が含まれる。場合によっては、結果や考察の背景として必要な理論や前提知識が独立した項目として含まれる。一つのレポートに複数の実習課題が含まれる場合には、これらの複数のセットが含まれる場合がある。

実習書に書かれた**【目的】**は、実習を指導する教員の立場で書かれている場合が多い。丸写しではなく、実習内容を行うにあたっての目的を自分の言葉で書き下す必要がある。

【方法】は、自分が実際に行った行為を書かなければならない。自分、あるいは、教員の手違いや、方針変更によって実習書の記述と異なる手順を行った場合は、そのとおりに記述する必要がある。自分の実験を失敗したので、他者の結果を借りてレポートを書くような場合にも、当然その旨を記載することが必要となる。これらはすべて既に行った事柄であるので、基本的に過去形で書かれることになる。

【結果】は、観察された事実のみを書かなければならない。本実習（病原生物学実習）では、スケッチが最初の結果となるはずである。観察した顕微鏡像だけでなく、分離培養した平板や、試験培地の変色した様子なども重要な結果であり、スケッチすることが望ましい。まずこれらの観察結果について、その色や形状などを、**自身の解釈を入れずに記述する**必要がある。

その上で、得られた結果から「論理にしたがって必然的に得られる結論」（これは厳密には考察に含まれる）については、結果の欄にまとめると良い場合がある。本実習では、グラム陽性・陰性の判定結果や、OF 試験の判定結果などがこれにあたる。

【考察】は、前述の実験結果を踏まえて、著者がどう考えたかを記述する場所である。レポートの評価はこの欄で決まるといっても差し支えない。考察には、先に述べた「**①論理にしたがって必然的に得られる結論的考察**」と、「**②推論、想像からある結論を導く推論的考察**」[c]があり、両者は読者が区別できるように記述することが望まれる。②の推論的考察には、著者自身の考えが含まれるはずであり、その推論が正しいものとは限らないが、間違えた推論をしたからといって間違ったレポートになるわけでない。間違えた記述をすることを恐れずに、自分自身で解釈して自分の言葉で記述することが良い実習レポートを書くコツである。

それらの考察をした上で、他の文献をあたってその妥当性を検討すると、さらにより良いレポートとなる。しかし、それらはあくまでも自分の結果を元にした自分の解釈の後にくる副次的なものであるので、**「調べ学習」の結果だけを記述して考察した気分になってはならない。**

他の文献を引用した際には、巻末に著者名とタイトルをリストするだけでなく、どの記述についてどの文献を参照したかを逐一明らかにする必要がある。日時によって書き換わることがある Web 頁などは参照した日付も記述すると良い。

別途**【課題】**が出されている場合もあるが、それはレポートに必要な考察とは別に課せられた宿題にすぎない。**考察は常に自分の結果を元にして、自分の言葉で書く必要がある。**

最後に、**【自由なコメント】**として、実習を終えての感想文や、不満点・やりにくかった点などを書くこともできる。この項目は評価の対象とはならないが、より良い実習へとアップデートするための参考となり、後輩たちの実習に活かされる。

---

[a] 2019 年 11 月 06 日初版、2019 年 12 月 19 日 Web 公開用に微修正。

[b] ariga@yamaguchi-u.ac.jp

[c] この記述は、東京大学工学部応用物理学教室「物理工学実験法」のテキストを参考にした。